

ふどういんの かぐら
不動院野の神楽

大字不動院野に伝承されている大杉神社略縁起によると、下総国一ノ宮香取社が葛飾郡に分社されたとき、天下泰平・国家安穩・諸厄諸難解除および家内安全守護の神として分社奉斎されたようである。

この社は、今宮大杉大明神と称したが、明治初期以後大杉神社と改められた。この社前にて奉納される神楽囃子を安婆あんばばやしという。大杉神社の祭神は倭大物主櫛甕玉命やまとおおものぬしくしみかたまのみこと（安婆天狗の神：船霊様ともいわれる）と伝えられるところから安婆ばやしの語源となったものと思われる。

大杉神社は不動院野の大乗院（新義真言宗明治初期の廢仏毀釈によって廢寺となった）の境内に祀つてある。その由緒によると、天喜五年（一〇五七年）源頼義が奥州征伐（前九年の役）のとき、当地で暴風雨に遭い敵の來襲を受け多くの戦死者を出した。中に兵糧方の大野垂併も戦死したので、その供養のため大乗院を建立したと伝えられている。

今から約千二百年程前、大乗院住職げんちゆう玄中という僧があり、神仏混合の時流をさとり今宮大杉大明神を境内に奉斎して寺運の向上をはかつたと伝えられている。

神楽は、常陸国鹿島郡阿波村（茨城県稲敷郡桜川村阿波）に伝わるもので、当地に伝来された時期は不詳である。現在保存会が所蔵している道具入れの箱に武蔵国葛飾郡幸手領不動院野邑東組中 嘉永六年丑九月八日造之 と記されたものがある。

以前は「太鼓連中」と称した神楽組があった。「太鼓連中」は不動院野の東組の者で組織されていた。相続人が義務教育を終了すると、この組織に入り継承してきていた。終戦直後まで、農閑期になると早朝と夕方から夜にかけて練習していたので、遠く粕壁の町並まで「はやし」の音が聞こえていた。

昭和四十五年八月二十五日「不動院野芸能保存会」が結成され、後継者の育成につとめている。現在、保存会の会員は四、五十名いる。会員は囃子、舞とも上演できる人たちで、四グループで編成されている。

神楽は、四月十五日大杉神社の例祭に奉納される。また、「太鼓連中」時代には市内の八坂神社夏祭り、備後須賀稻荷社例祭、杉戸町や東京の日暮里、駒込などにも出向いて演じたことがあった。いまも市内の夏祭り等で演じている。

初出「広報かすかべ 昭和五十三年七月」かすかべの歴史余話